

神道集 十八諏方大明神五月会事

南北朝中期。安居院唱導教団作。

諏訪大明神の五月会の縁起であるが、戸隠山の鬼王の官那羅退治の話になっている。ただし戸隠山に住む鬼王ではあるが、前半の活躍の場は都であり、後半、帝の命によって満清が鬼王退治に下向した時には浅間の嶽に移っている。つまり戦いの場は浅間になるので、戸隠山は場面としてはない。

原文を交えつつ粗筋を述べる。

光孝天皇の時代である、

此帝御時、信濃國一人有^ニ鬼王^一、此土^ニ渡^ニ九年^ニ成^ル、
都^ヘ常^ニ上^テ、人^ヲ犯^ヌ事^シ無^レ限^リ、鳥類・童兒、或^ハ美女、思^ヒ
々^ノ人^ノ意^ニ随^テ遊^ヒケリ、此鬼極^テ笛^ヲ好^ミケリ、己^カ身^ヲ一^ヲ世^ハ界^ニ

一 思トッ ヒケル、名官那羅申ヲハ トッ ケル、鬼婆國之自ハ亂婆羅王一五

十二代孫子也、不思議ノ ヲソ笛持ケル、上節付房シには フサ トシテ々ニケリ有

二青葉一房ト さ・小葉二ツツ一、三ツ青葉アリ、日暮ノ ヌレハ、露打置テ、

入器タル モ濡鹽垂タリ、竹色ノ モ只今切タル ニ樣青カリケリ、佐青葉テコソ

笛申ヘトモ ケレ、此笛德ノ ニハ、口當吹ヲ テ ケルニ、師合習ニ テ ハネトモ フネニ、思音諸

樂被ケリ吹るゝなり、但主嫌シ ヲソ、總聲有程物シテ ヘノ る、我心ヲハ其ニ

聲ヘノ シキ事歡シ只自在也、又善惡吉凶ハ ノ ヲモ此覺レニテヲホヘケリ、自レ臣下一

外ハ叶ヒカタシ、

在原の中將業平は策略を巡らせてこの笛を奪い帝に献上するが、鬼王は返還を求めて帝の前に現れる。帝が変換をためらうので、

鬼リヲ瞋シテ成ニ、本ケリ身の成け、其長二丈計リにて、五色ノ ヲ々シツ顯シ、自レ身ヲ火出シテ、燃出氣風成ヘテ ルハト、人民憂ヘ、京中動ヲ、皆其氣カス

風當惱物、幾千人云事不知、

しかし、鬼王は帝の威光を畏れて退出するついでに女房二人をさらっていく。鬼王退治を命じられた満清に途中で二人の男が供に加わり、鬼王は、満清が下向すると聞いて、戸隠山から出て、浅間の嶽に移つたと告げる。浅間の嶽の城から眷属と供に現れた鬼王は、

長高二丈計也、自_レ身出_レ火、九足八面鬼也、

しかし、二人の者の働きで鬼王は捕らえられる。実はこの二人は尾張の国の鎮守・熱田大明神と信濃の国の鎮守諏方大明神であつた。

満清は功により大納言に昇進し、信濃をはじめ十五カ国を賜わつた。そこで満清は熱田の大明神に四十八カ所の土地を寄進し、諏訪の大明神には特別に十六人の大頭を

定め、諏訪郡をすっかり寄進した。御頭は、桓武天皇の
おんとう御代からあるが、この時に特別に定められたものである。
る。

後、諏方大明神、熱田大明神、満清、印度の王等の本地
垂迹関係が語られる。

註 原文は古本系で赤城文庫旧蔵本を底本とした「神

道大系 文学編一 神道集」に依った。東洋文庫
に、現代語訳の流布本系の「神道集」がある。